

灰鍋の底

卯月紺

でも、ゆっくりだけど呼吸してるし、脈はあるみたいだから寝ているだけのようだ。

どうしよっかなあ。

行倒れさんの、前髪が鬱陶しそうなのでそっとよけた。

案外触り心地がいい。

「おっ、」

美人だ。

男女どっちかわかんないけど、行倒れさんは綺麗な顔だ。

色白で、鼻筋が通ってて、唇は薄め。閉じられた目の睫

毛は長い。

「ふむ、」

これ、拾ったほうがいいかもな。

相手を起こさないようにそっと持ち上げ、肩に寄りかか

せる。軽い。

アパートまでの残り約百メートル。俺はゆっくりと歩いた。

仕事上がり、いつもの店で買い物を買って済ませて、アパートへの近道、路地裏を歩く。俺の、いつもの帰り道。たまに野良猫がいたらひと撫でていくが、いつも代わり映えない道。

だけど、今日は妙なもんが落ちていた。

「…なんだこれ」

切れかけ街灯の不安定な光に照らされるボロボロのパ

カー、いや、それを着た人間が倒れてた。

行倒れ、初めて見た。

関わりと面倒くさそう。でも、ほっといても面倒なことになりそう。つか、こんなところに倒れてるなんて、おそ

らくまともな状況のやつじゃないんだけど…

仕方ない。とりあえず声かけて、生存確認だけでもする

か。

「おーい、生きてんの？」

頬を軽く叩いて声をかける。反応、無し。

「よいせつと」

アパートに書いて、俺は行倒れさんを部屋の隅に寝かせた。そのままでは寒いので毛布を一枚かける。

よく寝てるな。よほど疲れてるのか…

目の下にはうっすら隈がある。撫でると少し肩が動いたが、起きなかった。

「さて、」

行倒れさんはそのままにして、俺は台所に立った。

袋から見切り品の野菜を取り出す。

小さいやつ、不恰好なやつ。どれも安くて、食費を抑えるのに役立っている。見た目なんて腹に入れば同じだ。

適当な大きさに切って、鍋に入れる。この鍋、元は光沢あったんだけどなあ。今では使いすぎて、銀色というより灰色だ。

冷蔵庫を見ると、ベーコンがあったのでそれも入れて煮込むことにした。

火をつけると、ほんの少し暖かくなる。

あー、気持ちいい。

そのままじっとしてると、ノックがした。

誰かはわかる。悪友のあいっだ。

「いる？」

「おー、入っていいぞ」

「サンキュ。酒あるんだけど一緒に…誰かいんの？」

「行倒れの美人さん」

「は？」

俺の発言に間抜けヅラになる。まあ、俺も同じこと言われたらそんな顔になるけどな。

鍋の火を弱めて、あいつに行倒れさんを見せる。

「あー、確かに美人だわ」

「だろ」

「で、どうすんの。こちら辺に倒れてたならまともな人じゃないよね」

「とりあえず事情を聴く。で、場合によっては紹介屋に相談して紹介料でも貰おうかなって」

ここで生きる人にただで人を助けるお人好しは少ないだろう。俺だって、灰色の仕事をしている。

そういうやこいつは別だ。仕事は黒っぽいのに人がいい。

悪友はなんとも言えない顔をしている。

「お前がまともに人助けするとは思ってなかったけどさあ」  
「だってこちら辺で生きていくなら紹介してもらったほうが安全じゃん。この人、男女どっちだとしてもいいお店紹介してもらえそうだし」

「そうなんだよなあ…なあ、変な音しねえ」

「あっ、やば」

鍋が吹きこぼれそうになってた。弱火だからって油断はできない。

火を止めて、野菜の硬さを確認。よし、柔らかくなって  
る。

スープの素で味を整えて完成だ。

「なあ、俺ももらっていい？」

「どーぞ」

自分の分をついでから、おたまを渡す。

先に一口食べる。少ししょっぱかったが問題ない。

悪友も自分の分を持ってきた。まで、ベーコン全部入れてないよな。本当俺には遠慮しないというか。

それにしても、うまそうに食うよなあ。作った側としては、まあ、悪くないな。

ふと、スープを持ったまま行倒れさんに近づく。  
ピクリ。

あっ、動いた。もう起きるかな。

ゆるゆると、目を開ける。

スツとした、綺麗な目。やっぱり美人だった。

「おはよう、行倒れさん」

「…あっ」

かすれた声。やっぱり性別の判断はつかない。

さて、何から聞こう。

クゥ。

小さく、行倒れさんのお腹が鳴った。

「とりあえず、スープでも食べる？ まだあるはずだけど」

鍋を見ると、底の方に小さな野菜ばかり残ってた。

あっ、やっぱりベーコン全部食べやがった。

まあ、ろくに食べてなさそうだし。こっちの方が消化が  
いいか？

器を渡そうとすると、行倒れさんの手は震えていた。

「食べさせてあげたら？」

悪友の言葉に、俺は頷く。

スプーンに少量乗せて、薄い唇の間にそっと差し込む。ゆっくり咀嚼して、嚥下。喉が、ゴクリと動く。

よく見ると喉仏がある。男性だったのか。

それからそっと手を伸ばしてきたので、器を渡した。

一口ずつ、しっかり食べている。

悪友がこつちを見て、どうしようかというふう<sup>に</sup>首を傾げた。

さあ、どうしようというか、どうなるかな。

ただなんとなく、彼はここでも生きていけそうな気がした。

食べている彼は生きてる顔をしている。どこにいてもきちんと食べてかないやつは生きていけないから。

灰色の鍋底には、一滴も残り物がなかった。

終わり